

# 保育の変革を目指して (6)

――折々に考えたこと――

入江礼子

## 保育者の初めの数年間を支える

子どもが生き生きと生活できる園へ

Y幼稚園は五年間で、子どもの元気な声が聞こえる幼稚園になった。五年前には想像だにできなかった、園庭に子どもの声が響く、園に変わっていった。と同時に「先生、次は何するの？」と静かに尋ねてくる子どももいなくなった。もちろん遊びを見つめるまでの彷徨の時間を過ごす子どもはいるが、遊びが決まればそこでしっか

りと遊びだす。子どもたちは遊びたくて幼稚園に来るようになった。考えてみればこんな当たり前の姿になるまでも少なくとも二年の月日が流れたように思う。

「子どもが幼稚園で遊ぶ」ということは当たり前と想っていたが、そうでない事実と直面したこと、そして「遊ぶ園」にするためにはいくつかの条件があること、特に保育者の意識改革が必要であることを学んだ五年間でもあった。

## 一枚の覚書

Y幼稚園の兼任になる三か月の前の一月のこと、初めてY幼稚園の先生方と会合をもち、私自身の方針を話したことがあった。その時の内容は一枚の覚書となつて残っている。その内容は以下のとおりである。

### ・園内研修の充実について

#### ① 指導計画を立てる。

#### ② 週一回月曜日を園内研修日とする。その際に週日

案の検討、保育の事例検討を行う。

### ・園を開く その1：他園との交流

現在のところ公立H幼稚園と私立M幼稚園との交流

流研修会を予定している。

### ・園を開く その2：実習生の出入りについて

教育実習生のみではなく、大学生の自主的な実習

を受け入れる。

### ・園を開く その3：大学の保育関係教員との連絡を

必要に応じてとっていく。

今読み返してみると、いくつかに気づく。まず

「園内研修の充実について」だが、五年間を通してはこの計画通りに行うことができたように思う。この中で思うに任せなかったのは「保育事例の検討」であったが、園内研修だけは週日案の検討を主としたものを軸として継続した。「園を開く その1」に関しては公立園との交流研修会こそかなわなかったが、私立園との交流研修会は数回行った。また「園を開く その2」に関しては定期的な教育実習生の受け入れと園長・副園長のゼミ学生を中心とした年単位での継続した自主的な実習を積極的に受け入れた。「園を開く その3」に関しては一部保育学関係教員と緊密な連絡を取りながら研究フィールドとしての提供を行ったり、Y幼稚園の保育者を含めた共同実践研究を行った。こうして見てくると、保育の変革を進めるために最初に意図したことはこの五年間の間に大方クリアしたことがわかる。

しかし、一つ、大きなものがクリアできなかった。

それは「保育事例の検討」を主にすえた園内研修である。一人ひとりの保育者の保育者としての成長をうなが

し、その質を高めるためには「保育事例」の検討を主としたカンファレンス形式の園内研修を行うことが有効であることは経験的に知られており、多くの園では「園内研修」をこの形で取り組むことが多い。参加者全員が実質的に対等な立場で参加できるカンファレンス形式の園内研修は私自身の目指すところでもあったが、これがなかなか実現できなかったのである。

### 園内研修分析の試み

もしかしたら、これを実現できなかったという事実には、Y幼稚園の特徴があるのかもしれない。こう考えた私は、Y幼稚園の実践を離れてからの自分の課題として、この五年間の園内研修の議事録を読み直す作業を始めることにした。議事録を読み直す余裕は実践の場の責任を担っていた時には到底なかった。時間的にも、体力的にもそれは無理だった。しかし現場から離れた今、その余裕はある。自分たちの歩みをもう一度たどり、そこでのことを細かく洗い出すことで、新たに覚えてくるものがあるかもしれない。Y幼稚園の実践の場に身を置くチャ

ンスを与えられた時もそうだったが、なんだかワクワクしている自分がいた。宝探しに行く感覚といったらよいだろうか。はやる気持ちを抑えつつ、その試みに取り掛かった。

### 初期の二年間の議事録から

実際に園内研修の議事録をひっくり返して見ると、二〇〇一年度、二〇〇二年度の議事録はしっかりと記録者が清書する形で残されており、逐語記録に近いものであった。しかし二〇〇三年度から二〇〇五年度の三年間は、清書して残されたものではなく、園内研修の時にメモとしてとっておいた記録がそのままの形で残されていた。議事録の形を大きく変えたのにはわけがあった。当時、議事録をしっかりと清書して残すだけの余裕は保育者たちには残されていなかった。それをすれば保育者が体



をこわして倒れてしまう。そんな現実もあり、「やれる範囲」での議事録となったのである。読み返しながら、そんな状況も脳裏によみがえってきた。いつも、精一杯、そしてぎりぎりだったことを。

読み返しながら、一体ここから何が出てくるのか、皆目見当がつかなくなつた。読めば読むほど自分の心によみがえるのは当時のあれやこれやで、押し寄せる事実の波に何度も足をすくわれそうになつた。救命胴衣か浮き輪がなければ、私はこの波に飲み込まれ、溺れてしまふ。そこで考えた挙げ句、私としては初めての試みである一つの方策をとることにした。それは初めの二年間分の議事録に残されている保育者の発言を意味単位で分類し、カテゴリーを抽出するという作業である。これは発達心理学の領域などではよく使われる手法であるようだが、私にとっては初めての体験である。今まで、感覚・経験的な勘で判断してきたこと、行動してきたこと、今回の分析手法で出る結果が、どのように合致するか、しないのか。この手法が救命胴衣、浮き輪になるのかどうかを確かめてみることにしたのである。

やり始めてみると、新米であるにもかかわらず羅針盤を忘れて宝探しの旅の船出をした船長のようなもので、これもまた言葉の海をさまよい、漂い続けた。

いささかオーバーな表現になつてしまつたが、初めのワクワクした気持ちはどこへやら、暗澹たる気持ちにもなつた。そんな日を送っていたが、ある若い研究者に助けられて一つの先行研究に出合つた(註)。そこでの分類項目を参考にしながらY幼稚園の園内研修で語られていることを勘案して六つの領域を考えた。つまり「子ども」「自分」「親」「他の保育者」「園務」「保育観」の六領域である。初めの二年間に行われた七十三回の園内研修で話し合われた内容はほぼこの五つの領域で網羅することができると、これはそのすべてに内部の当事者として参加した私は直感的に感じたことだつた。

もう一度議事録を読み返してみると、話された内容の一つひとつが面白いようにこの六領域に当てはまつていく。これは使えろと考え、同じ先行研究を参考に「保育観」を除くそれぞれの領域を六つのカテゴリーに分けた。①事実・実態についての認識 ②願い・課題 ③事

実・実態に関する価値・意味づけ ④事実・実態に基づく予測 ⑤今後のかかわりの筋道を考える ⑥それぞれの領域に対する自分のあり方の六つである。こうして全部で三十一のカテゴリーに分類していったわけであるが、この作業は予測に反して、とてもはかどり、短期間で分類することができた。つまり、この二年間のY幼稚園での園内研修で話された内容は大方このカテゴリーで分類できてしまったのである。

### 分類の結果から見えてきたこと

〈経験年数の多い保育者はよく発言する〉

一体、私たちは園内研修で何を話し合ってきたのか。これはこの分類をすることでとても明白になった。全体的に言えば二〇〇一年度より二〇〇二年度の方が発言の平均値が高くなっている。つまり二年目の方が園内研修での発言量が増えているということであり、これは研修が活発化したということであろう。領域でいえば「子ども」領域の発言が圧倒的に多いことがわかった。それも若い保育者に多く、年度が上がるとその発言数も多く

なっている。発言が全体的に多いのは経験十一年以上のベテラン層であり、比較的どの領域にもその発言が多く見られる。それより若手の保育者の発言はそこまで高くない上に、「子ども領域」以外の発言は決して多くはない。

つまり、Y幼稚園の園内研修の初めの二年間は私が理想とした「カンファレンス型」の園内研修には程遠い姿、経験年数の高い、園長・副園長・主任という層がかなりの部分と話しているという姿が浮かび上がってきたのである。このような現実はある、とどこかでは認識してはいたが、それよりも「若い保育者にも発言してほしい」という思いがその現実をしつかり見つめる目を曇らせていたように思う。

〈実態と事実の認識に終始する〉

次に、それぞれの領域の中味を吟味することにした。経験年数の少ない保育者がよく発言したのは「子ども」領域であったが、ここは①子どもの事実・実態についての認識 ②子どもへの願い・子どもの認識 ③子どもの

事実に対する価値・意味づけ ④子どもの事実・実態に基づく予測 ⑤今後のかかわりの道筋を立てる ⑥環境構成のあり方、というカテゴリーで構成されている。この中では①子どもの事実・実態についての認識が圧倒的に多かつた。園内研修では週日案の検討を柱にしていたこともあり、担任を受けもつ経験年数の少ない保育者がこの検討の際に子どものことを多く語っていたということになる。これは私の当時の記憶とも一致する。

しかし記憶だけでわからなかったのは、「子ども」領域のどういう部分についての話がなされていたかということである。大まかには子どものことが話されていることはつかんでいても、このように「事実・実態」について多くの時間を割いていることまでは意識できていなかった。「子ども」のことが話されていたと安心していただけもある。問題は「子どもがどんな実態であるから、その実態について自分はどう思い、そのことを基に次の予測を立てたり、自分の子どもに対するかかわりの道筋を立てたり、環境構成のあり方を考えたりする」ことまでは及んでいない点である。年度を重ねた二〇〇二年度

には①から⑥までのカテゴリーのすべてについて発言が増えたとはいえず、「①の事実・実態の認識」から先へはなかなか進んでいない。つまり、「子ども観もあいまいで、次の実践の方策も思うようには出されていない状況が浮かび上がってきた。この「①の事実・実態」のみを多く語る傾向は他の領域でも同じような結果をみている。実態はつかんでいるが方策がない中、実践でも苦戦している様子が浮かび上がってきた。

#### 〈「他の保育者」領域の特徴〉

この六つの領域の中に「他の保育者」に関する領域がある。ここは他の領域とは様相を異にする。経験年数の高い群がかなり多くの割合で発言している部分である。精しく見ていった結果、「②他の保育者への願い・他の保育者への課題」「⑤他の保育者へのかかわりの道筋を立てる（指導）」が高いことがわかった。私自身の意識としてはここまで保育者への願いや課題を口にし、具体的な指導にまで踏み込んでいるという認識はなかったのだが、発言内容の分析をしてみると、これらのことが明

らかになったのである。

ここでは自分の感じていたこととはいささか異なる結果を得たことになる。私の中では「保育の変革を目指して」理念を追いたい、そして前から述べているように園内研修は参加者が平等であるべきで「カンファレンス型」が目指されるべきであり、少なくとも私自身はそれに向けて努力しているつもりであった。しかし、事実の詳細を検討してみれば、このような結果が得られたわけである。結果から見れば経験者主導の指導がかなり行われていたことになる。考えてみれば経験年数の少ない若い保育者と経験年数の多い保育者が一緒に会議ではよくあるパターンであり、私たちの初めの二年間もそこからは逸脱できなかったということであろう。「カンファレンス型」としての園内研修が機能するようになるまでには、いくつかの条件がそろわなくてはできないのではないか。私としては認めたくない結果を得ることになったことで、そこにたどり着くまでの条件を考えるようになった。理念はもちつつも、ものには順序があるということはこの分析を通して改めて考えさせられている。

〈指導計画検討を園内研修に入れることの意味〉

私は初めから園内研修に週日案という指導計画の検討をその中心に置いてきた。二年間で七十三回行った園内研修のうち、この検討を行ったのが合計四十二回、この検討のないものが三十一回であった。この研修の構造の違い二つを比較することにした。

その結果、特に経験年数の少ない保育者は指導計画の検討ありの園内研修において「子ども」領域の発言が増すことがわかった。経験年数の多い保育者にはさほどの変化は見られなかった。では指導計画の検討なしの構造をもつ園内研修の特徴はというと、「自分」領域の発言が多くなることであった。つまり、自分についての今の状況の認識から、自分の課題、今後の実践の方向の指向や子どもの環境としての自分のあり方まで、「自分に対する省察」が多くなったのである。それぞれの構造でこのような特徴が出てくるのは、経験から納得のいくことであった。

問題は、この二つの構造をもつ園内研修をどういう形で位置づけていくかであろう。これはそれぞれの園のそ

の時の年齢構成、経験年数などによって、さまざまなパターンになると思われる。ただ、経験年数の少ない保育者が多い園であれば、このように若い保育者が発言できるチャンスを確保するという意味で、指導計画の検討を入れることは意味があると思う。Y幼稚園だけではなく、日本の幼稚園の多くは若い保育者が担任を担っている。それら保育者を育てる手がかりがこの園内研修の組み方にあるように思った。

### 生き生きと保育ができる園を目指して

子どもたちの元気な姿を保障するのと同様に、保育者もまた元気で生き生きと保育の仕事に取り組めるような方策を考えて進んできた五年間ではあったが、結果的には子どもが生き生きと生活できるように支える保育者にとっては、体のきつい五年間になってしまった。保育を支える保育後の仕事をいかに効率的にするかは、保育者が体をこわさないためにも大切なことであるが、実はここが一番難しかった。園内研修も「やる」と決めてずっと継続してきたが、多くは手探りの状態での継続であっ

た。指導計画の作成もしかり、保育の記録もしかりである。ただ、そんな日々を積み重ねるうちに、子どもたちは元気に遊ぶようになってはいった。

残る課題は、保育者が成長感をもちつつ仕事を続けられるような方策を得ることである。この五年間に保育者の交替も多くあった。手探りで始めたゆえに、力尽きたこともある。若い保育者が生き生きしさを保ちながら保育を続けられる方策を、この五年間の歩みをもう一度丁寧に見直すことで提案できるようにすることが、Y幼稚園で五年間一緒に仕事をしてきた保育者の体を張った努力に少しでも報いることになると思っている。

(公立女子大学)

註 吉村香・吉岡晶子・尾形節子・上坂元絵里・田代和美「保育者の実態把握における実践構想プロセスの質的検討」『乳幼児教育学』第7号 一九九八

☆この連載は今回で終わります。